

### 第3回夜間中学設置検討委員会のまとめ

日 時：令和5年10月16日（月）15時00分～17時00分

場 所：三重県庁7階 教育委員室

出席者：夜間中学設置検討委員会委員 10名

県教育委員会事務局：井ノ口次長

小中学校教育課 早田課長、前田班長、丸野

#### ■個別最適な学びの実現について

- 年度当初に、先生と生徒がしっかりとディスカッションをしながら、履修計画を一緒に作っていきけるとよいのではないか。弾力的に運用できるように工夫をしていただきたい。
- 中学校なので単位制はできないが、生徒自身が担任や教科担当と一緒に自分の学びのプランをオーダーメイドで作っていただければいいと思う。それが本当の意味で生徒中心であり、これができれば画期的である。  
ただ、このようなやり方だと教員の負担が大きくなるのが懸念されるので、今後議論をしていく必要がある。
- ある程度のコース設定は必要だと思うが、入学してきた生徒に応じて、柔軟にコース設定を変更していくことも考える必要がある。  
生徒は学習経験や人生経験を含めさまざまな背景の方がいるので、それらに応じた履修の仕方ができればいいと思う。
- 夜間中学は社会人の入学も想定されるが、あまりに内容が簡単すぎると辞めてしまうおそれもある。科目によって理解度にばらつきがあると思うので、一人ひとりに応じて履修計画を考えるのは大事だと思う。
- 形式卒業者は、既に卒業証書を有しているので、弾力的な学びは良いと思う。他方で、未就学者は他の公立中学校と類似のカリキュラムで学ぶなど、未就学者を念頭に置いたコースも想定した方が良い。

#### ■教職員の体制について

- 生徒一人ひとりに応じた個別支援をするためには、それだけ教職員やスタッフの数が必要となる。夜間中学でやっていきたいことを明確にし、そのために必要となる体制については、設置検討委員会からの提言として、関係部局にしっかりと伝えていく必要がある。
- 教員が一人で生徒一人ひとりの計画を立てていくのは大変である。学習ボランティア等を積極

的に採用して教員の負担を減らすことによって、授業の質を高められるような体制をつくる必要があるのではないか。

#### ■外国にルーツのある方への支援について

- 通訳など外国にルーツのある方の支援に関しては、人材確保のハードルが高い。夜間中学ではどれぐらいの言語が必要となるのか。相応の人材を確保していかないと、学び場としての期待をして入学してきた生徒や保護者たちの期待を裏切ることになりかねない。そうならないためにどうしていくべきか検討していく必要がある。
  
- 県の国際交流財団には 25 言語約 300 名の通訳者が登録している。定時制高校等からの夜間の通訳依頼は確保が困難である傾向にある。夜間中学もどの言語にどの程度の人数が必要か、早期に決める必要がある。多言語が話せる人材は引っ張りだこであることに加え、公的機関は民間に比べ給与等の面で不利だという事情もある。  
また、通訳は求められる内容が高度であるため、単に採用するだけでなくきちんと研修体制を整える必要がある。
  
- 生徒が日本語を身につけるためには、授業中は日本語で学ぶことが望ましい。通訳には、どの範囲まで通訳をしてもらうかを研修で伝える必要がある。  
また、先生たちにはやさしい日本語で説明ができるように研修を実施する必要がある。生徒もやさしい日本語を使ってもらえると良い。どのように伝えれば理解してもらえるかということを考え、コミュニケーションを図ること自体が多文化共生になる。
  
- 通訳をつけることにもメリットとデメリットがある。ある公立の夜間中学では、中国語の通訳を毎日 3 人体制でつけているが、生徒は 1 年半経っても日本語を話すことができない。通訳をつけることで、日本語を学ぶ機会を奪ってしまっている可能性はある。
  
- 授業は日本語で、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーなどとの面談は通訳を介して母語で行うのがよい。また、母国の文化や習慣を理解している通訳がいると、カウンセラー等の理解が進む助けとなる。
  
- 松阪市が、外国にルーツのある生徒たちに対し「どんな時に母語を使用したいか」というアンケートをとったところ「悩んだとき」「ストレスがたまったとき」が一番多かった。母語で思いを吐き出す必要もあることから、相談対応は母語で行うのがよい。  
また、通訳の確保が難しいのであれば、リライト教材の活用や教材の開発をするなどの工夫が必要である。
  
- 0 時限目を日本語教育にあてるなど、日本語教育の時間を確保するための工夫が必要である。リライト教材は、外国にルーツのある方だけでなく、高齢者など夜間中学に通う他の生徒にとっても

有益である。

- 日本語の能力は生徒によってさまざまである。入学当初の段階で日本語の能力をきちんと評価したうえで、個別の学習支援計画を作成してほしい。そうすると、生徒たちの学びが継続しやすいし、教員にとっても生徒への支援や配慮の仕方が分かりやすい。

また、外国にルーツのある方は進学や就職に関する情報が日本人より少ないため、専門家による定期的なサポートが必要である。

- 年代によって日本語の習得の仕方は違う。夜間中学は様々な年代の方が通うことが想定されるので、それぞれにあった支援が必要である。
- 外国にルーツのある生徒たちが、日本語の習得をはじめ。本人が将来生活をするために必要な能力を身につけられるよう、県教委が行っているキャリア教育サポーターのような制度の充実を図っていただきたい。

#### ■体験活動、体験学習について

- 引きこもりの方、外国にルーツのある方、生活困窮者は、共通して体験活動の経験が少ない方が多い。地域の団体とつながれる行事など、学校だからこそできる体験活動をぜひ充実させてほしい。
- 夜間中学のような学校は、学校行事を含めて体験活動を広げていくことにより、生徒たちの学ぶ意欲も増していくのではないかと思う。教員の働き方改革に配慮しつつも、体験活動や体験学習の充実を意識した学校にしていきたい。

#### ■分校、分教室、遠隔教育（オンライン）について

- 遠隔教育については、学校以外で受けた場合の取扱いが国でも議論されているところであるが、可能であれば方針の中に組み込んでいただきたい。
- 分校と遠隔教育は分けて議論をすべきである。分校を設置する場合は、そこに5教科の教員をきちんと配置をして運営していくべきであり、オンラインによる授業はあくまで補助的なものという位置付けで考えていくべきである。

#### ■給食の提供について

- 食費がかかることで我慢してしまう人も出てくるが、給食は皆が食べるものだとして最初に意識付けをしておけば、皆が積極的に食べるようになり、それがきっかけで学校に来るようになるという流れが期待できる。
- 授業中にはなかなかお互い話すことはできないが、皆で食事をすることで仲良くなるきっかけになり、それが学校に通うきっかけづくりにもなる。

- 学ぶコースによっては、すべての授業が終わった後で給食の時間となり、給食がとりにくい状況が出てくる可能性があるため、給食の提供時間を授業と授業の間にするなど、時間帯については今後検討していただきたい。

■みえ夢学園高校との連携について

- みえ夢学園高校は全校生徒 453 名中 145 名が外国にルーツがあり、関係する国は 10 カ国にのぼる。日本語を学ぶ授業が 16 単位あり、通訳や日本語支援担当などの人材もいることから、支援体制は確立されている。夜間中学での人材確保が難しいのであれば、みえ夢学園高校の人材を活用することも考えられる。
- 三重県の夜間中学の強みは、みえ夢学園高校との連携である。食事の提供やノウハウを持った人材の確保に関して、校長先生が積極的に協力すると言ってくれている。ここまで連携できるのは、全国でもそんなに例がないのではないか。

以 上